

# 令和2年 第3回総務経済常任委員会会議録

令和2年3月9日 第1委員会室

## ○事 件

町長報告事項

- (1) トラウトサーモン養殖試験事業について（産業課・水産課）
- (2) 育成牧場の運営について（農林課）

資料提出による報告（新型コロナウイルス感染拡大防止の特例措置）

- (1) 八雲町水産試験研究施設の研究内容報告について（産業課）
- (2) 海洋深層水利活用試験の結果報告について（産業課）
- (3) 檜山海域洋上風力発電事業に関する情報提供について（産業課）
- (4) 八雲町産業人材確保・育成事業について（商工観光労政課）
- (5) 脱炭素型地域づくり検討事業（環境省）について（商工観光労政課）
- (6) 上の湯地区既存井現況調査事業について（商工観光労政課）

## ○出席委員（6名）

委員長	三澤公雄君	副委員長	牧野仁君
	横田喜世志君		大久保建一君
	田中裕君		宮本雅晴君

## ○欠席委員（0名）

## ○出席委員外議員（0名）

## ○出席説明員（7名）

産業課長	吉田一久君	水産技術主幹	田畑司男君
海洋深層水推進係長	黒丸勤君	水産課長	伊藤修君
農林課長	加藤貴久君	農林課参事	荻本正君
農業振興係長	宮下洋平君		

## ○出席事務局職員

事務局長	井口貴光君	事務局次長	成田真介君
------	-------	-------	-------

[ 開会 午後 1時59分 ]

◎ 開会・委員長あいさつ

○委員長（三澤公雄君） それでは、第3回総務経済常任委員会を開催します。

【農林課・産業課職員入室】

◎ 所管課報告事項

○産業課長（吉田一久君） 昨年12月からサーモン養殖の試験事業を行っており、先般、成長具合などを見るため、計測等を実施いたしましたので、試験事業の中間報告として本日はご報告させていただきます。

資料の1に沿って報告いたします。まず、試験の方法であります。海面養殖試験については、熊石地域では、熊石漁港内に10m鋼管枠イケス1基を設置し、そちらにトラウトサーモンの幼魚839尾を収容し試験を開始しております。収容尾数については、幼魚の出荷総重量をもとに1尾当りの平均重量から尾数を換算しており、総数を計測していないため、若干の増減はあるものをご理解願います。落部地域については、落部東野漁港内において熊石と同様に10mイケスを設置し、トラウトサーモンの幼魚402尾を収容しております。併せて、熊石地域では水産試験研究施設において陸上での試験を行っており、そちらは施設内の10t水槽にサーモンの幼魚79尾を収容しております。こちらは全数確認のうえ収容しておりますので実数となっております。熊石・落部両地域とも、昨年の12月13日の夜に青森県から種苗をトラックで搬入し、その後、12時間をかけて海水馴致を行い、14日の朝に各イケスに幼魚を収容しております。給餌については、朝夕の2回行っております。

裏面のほうになります。この12月からこの飼育を始めておりましたトラウトサーモンでございますが、この2月に入りまして中間の測定ということで実施してございます。熊石地域につきましては、2月26日、落部地域につきましては若干ホタテの作業等も始まるということ早めに実施しておりました、2月13日に測定のほうを行ってございます。その結果でございます。熊石地域につきましては生残数につきましては823尾、この間死んだ数が16尾、生残率が98.09%というかたちになってございます。平均体長でございますが、41.3cm、それで平均重量が1560gということで、当初入れたもののおよそ2倍程度に育つてるという結果になってございます。この測定にあたっては検体といたしまして5尾抽出してございまして、その5尾の結果についてはこの表1に記載のとおりでございます。それで体長とありますのは、口の先から、尻尾、骨の通つるところまでです。ヒレの先ではなくて骨の通つる身この部分までが体長で押さえてございます。それでその中段の尾又長というのは尻尾の真ん中の三角にくびれたところ。そこを尾又長でとってございます。以下の同じような形で測定してございますのでよろしく願いいたします。

落部地域につきましては、生残数が390尾、2月29日現在でへい死の数は12尾ということで、生産率は97.01%ということになってございます。平均体長が39.7cm、平均重量が1,160gということになってございます。このこちらのほうも5尾抽出して計測しておりました、

その内容につきましては表2にまとめたとおりでございます。あわせまして陸上の部分でございますが、こちら生残数が74尾、へい死が5尾、生残率が93.67%という結果になってございます。平均体長が36.6cm、平均重量が1,179gというような結果でございます。

一応この度の中間測定の中では一応生残率につきましては極めて高い数字で推移してると。あとは成長のほうも順調に生育してるということで、この後、海水温が15℃を下回る時期ですので、およそ6月くらいが目途になるかと思いますが、その頃までには3kg程度になるものも相当数現れるだろうというようなことで考えてございます。トラウトサーモンの養殖試験事業の中間報告ということで、以上のとおり報告いたします。よろしくお願いいたします。

○委員長（三澤公雄君） 報告が終わりました。委員の皆さんから何か質疑はありませんか。

○委員（横田喜世志君） はい。

○委員長（三澤公雄君） 横田委員。

○委員（横田喜世志君） 熊石地域と落部地域なんですけど、基本的に同じ海中でやって、同じくらいのサイズの生簀を使って、片方800、片方400というこの違いで、こういう中間測定結果になったのか、もしくは何らかの違いがあってこの差ができたのか、教えていただければと思います。

○産業課長（吉田一久君） 委員長。産業課長。

○委員長（三澤公雄君） 産業課長。

○産業課長（吉田一久君） まず、熊石の部分の、例えば熊石の陸上と海中の中でも、委員ご指摘のように成長のほうには若干の差がみられてございます。これまで初年度ということもございまして、それぞれ餌やりには熊石のほうでは漁師さん方が実際に行っていますが、そういった部分でまだ上手にできないというようなこともあったりするのかなとも感じてございますが、一応熊石のほうでも陸上と海のほうでは、この差がある部分については生育の環境等によるものかなということも感じてるところでございますけれども、一方で抽出した数も5尾ということで、全体に対しての抽出率というのも実際のところ少ないのかなと。そういった意味ではデータの的にちょっと偏ってるようなデータかもわからないということで捉えております。

また一方で熊石地域の海のほうは、我々といたしましては、順調に育ってるわけでございますけれども、特に今年日本海側につきましては大変海水温が高い状況で推移してございます。それで7℃を下回るような状況になると餌をあまりとらなくなるよと言われていましたが、これまで7℃を下回る状況もあるんですけども、大きく5℃を割り込むような状況も少なく、平均して高い状況で推移してきたということもあってですね、順調な成長がみられるのかなと。一方で噴火湾側のほうにしますと、おそらく日本海側より水温についてはいくぶん低いのかなと。そのように感じております。そういった部分で餌の捕る量なんかも今のところこのようなかたちで若干みられるのかなと。そういうような感じでございます。

いずれにしても最初の成長の差というのは、これから5月6月実際にどの程度大きくなるのか、そういった状況も踏まえながら、あと水産試験場あるいは普及指導所の意見を聞きながらですね、検討していかなきゃならないのかなと思っています。すみません、回答になってるか分からないのですが、よろしくお願いいたします。

○委員長（三澤公雄君） 関連でね、餌の回数は同じなんだけど使ったキロ数も同じなんですか。

○産業課長（吉田一久君） 委員長。産業課長。

○委員長（三澤公雄君） 産業課長。

○産業課長（吉田一久君） 実際にですね、餌の量なんですけど、これすみません熊石のデータで申し訳ないんですけども、熊石の漁港内なんですけど800数尾の中で、この2月なんですけど、測定時までには与えた餌の量なんですけども、1180 kg、これは20 kgの袋に相当しますと59袋になります。それで今度陸上のほうなんですけども、こちらの給餌数が63.9 kg、これは20 kgの袋にすると3.2袋ということで、実際海と他では数的には1/10なので、要は6袋くらい陸上でも給餌されてなきゃならないのかなって気もするんですけども、その部分に差が出て、これもきっと成長の部分にもおそらく影響してるんだろうと思うんですけども、やはりそこは飼育してる環境でも変わってくるのかなと。そのようにして熊石のほうでは捉えてるところでございます。

○委員長（三澤公雄君） 水産課長。落部の餌のデータ。

○水産課長（伊藤 修君） 委員長。水産課長。

○委員長（三澤公雄君） 水産課長。

○水産課長（伊藤 修君） 大変申し訳ございません。ちょっと数的なものは用意していないんですけども、基本的にはその尾数にあった一回の給餌量って決まってるんですけど、それにかけてですね、給餌をしています。それで、いろいろ餌やりのテクニックなんか正直あってですね、かなり言われてるのは、熊石は随分丁寧にやられてるようなんですけども、うちは青年部の皆さんでやって、ちょっと最初から少し差が出てるんですけども、その中で青森の持ってきたところの部長さんからも餌をこうやるんだよとか基本的なことは教わってやってるんですけども、どうしても少しテクニク的な甘さもあってですね、先ほど言いましたように水温の関係もあって、少し5尾だけのデータなんですけども、差が出てしまったのかなということで分析をしてございます。

○産業課長（吉田一久君） 委員長。産業課長。

○委員長（三澤公雄君） 産業課長。

○産業課長（吉田一久君） すみません。落部の状況は補足するわけではないんですけども、実際、熊石と東野の港の中で育ててるんですけども、僕らもちょこちょこ状況を東野のほうを見させてもらったんですが、やはり海なんですけど、透明度がちょっと違うところで水温が低くなると水面に上がってこずに中間で餌食べる状況が多くなります。それでそういった状況を熊石のほうは水が澄んでるので、それは目で見て把握できるんですけども、東野のほう、若干水が濁ってたりすることは結構あるので、そういった部分では養殖管理の部分では大変難しいものがあるのかなと。

実際青森のご指導いただいている部長さんの話も、基本熊石の給餌量を基本にそれで与えるように、要は熊石の半分ですから熊石10 kgやったら5 kgみたいなかたちで与えてほしいというのは、先ほど言ったように食べるだけ食べさせたいんですけども食べてる状況が沈んじゃうと見えないと。それで餌が結構粒がこまくて沈みも早いんですよ。なので透明度がいい環境であるとそこで食べてるのは見えるんですけども、ちょっと東野、海が澄

んでることもあるんですけどもちょっと濁ったりすると見えないということも管理のほうには大変なものがあるのかなと感じております。

○委員長（三澤公雄君） でもせっかくだから数字欲しいですよ。数字お願いします。

○水産課長（伊藤 修君） 大変申し訳ありません。

○委員長（三澤公雄君） それと5匹の計測値なんだけど、フィギュアスケートの祭典みたいにさ、最高値と最低値を削って、それで残り3つで平均とるというやり方をちょっとやらせてもらったらし数字が変わってきて陸上養殖のほうがその計算でいうと平均1,331で、落部抜いちゃうことになるんだよね。いろんな分析もしたいから、そういう意味で数字は出してください。お願いします。

○水産課長（伊藤 修君） はい。

○委員長（三澤公雄君） ほかに委員の皆さんからサーモン養殖についてなにかありませんか。なければ終わりました、次の報告に移ります。八雲町水産試験研究施設研究内容報告についてお願いします。

○産業課長（吉田一久君） 委員長、それは資料のみで。

○委員長（三澤公雄君） そうでしたっけ、ごめんなさい。失礼しました。そうでしたね。

○委員（大久保建一君） すみません。サーモンについて。

○委員長（三澤公雄君） サーモン。はい。

○委員（大久保建一君） 養殖終わるころには3kgくらいって言ってましたよね。予想でいいので売価ってどれくらいになるのか。

○産業課長（吉田一久君） 委員長。産業課長。

○委員長（三澤公雄君） 産業課長。

○産業課長（吉田一久君） 実際に青森で今別、深浦のほうでサーモン養殖やってるところでは、成魚大体2.5kgから3kgということで、キロ当たりですね1,000円から1,200円で取引されてると聞いてございます。

○委員（大久保建一君） 1,000円から1,200円。

○産業課長（吉田一久君） ですので1尾3kgほどですと3,000円から3,600円というかたちで取引されてるということで聞いてございます。以上です。

○委員（大久保建一君） はい。

○委員長（三澤公雄君） 大久保委員。

○委員（大久保建一君） ちなみに稚魚の仕入れの価格ってなんぼくらいでしたっけ。

○産業課長（吉田一久君） 委員長。産業課長。

○委員長（三澤公雄君） 産業課長。

○産業課長（吉田一久君） 種苗なんですけれども、こちらのほうキロ、1尾あたりだいたい800gくらいの幼魚、これは1尾ではなくてキロで購入してございまして、1kg1,000円です。それに消費税。あわせて青森からのトレーラー等で熊石のほうに輸送してございまして、その輸送費が50万となっております。

○水産課長（伊藤 修君） 委員長。水産課長。

○委員長（三澤公雄君） 水産課長。

○水産課長（伊藤 修君） 八雲も同じく輸送料が50万ほどかかっております。それでキログラム当たり消費税込みで1,080円でございます。

○委員長（三澤公雄君） いいですか。

○委員（大久保健一君） はい。

○委員長（三澤公雄君） 大久保委員。

○委員（大久保健一君） 仕入れがキロ1,000円で売値もキロ1,000円なら大きくなったら利益というのは。単純にいけば。

○委員長（三澤公雄君） 稚魚1キロは、1尾が800gだから。

○水産課長（伊藤 修君） およそ800円。

○委員（大久保健一君） だけど単純に総量で行けばさ。そういうことだよ。大きくなった分だけ利益出るんだよね。理解しました。

○委員（牧野 仁君） あとそれに関連して。

○委員長（三澤公雄君） 牧野委員。

○委員（牧野 仁君） 餌の話で、今まで20kgが59袋、餌使ったということですが、これ餌代ってどれくらいするの。

○産業課長（吉田一久君） 委員長。産業課長。

○委員長（三澤公雄君） 産業課長。

○産業課長（吉田一久君） 今使ってる餌代なんですけれども、日本産生の普通の配合でしてキロ195円送料込みで入れてるところです。ですので、20kg袋で3,900円ですね。というかたちであります。

○委員（牧野 仁君） それを毎日3,900円かかるってこと。

○産業課長（吉田一久君） だいたい今ですと熊石のほうはおおよそ1回の給餌量は10kgか12kgくらい1回にやりますので、熊石ですと1日1袋ちょっとかかります。それで今だいたいなんですけれども、1尾おそらく3kgまで成長するには、これも餌のやる、まだ不慣れなところもあって無駄にしてるものもあるのかなと思うんですけれども、だいたい1尾当たり5kgから6kgの給餌になるのかなと考えてございます。この辺につきましても最終的な費用対効果の、あるいは餌料効果的なものの測定の中で詳細のところは詰めていきたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

○委員（田中 裕君） はい。

○委員長（三澤公雄君） 田中委員。

○委員（田中 裕君） これ成魚になると出荷しますよね。それでまた幼魚っていうの。これからの事業はどういうふうにして流れていく予定でおりますか。

○産業課長（吉田一久君） 委員長。産業課長。

○委員長（三澤公雄君） 産業課長。

○産業課長（吉田一久君） まず試験事業でございますが、本来ですと11月に入れようと思ったんですけれども、だいたい海水温が15℃を下回る11月12月くらいに800gの幼魚を入れて年を越して6月くらいまでで3kgに育てると。これを1サイクルとした試験を来年度は数を増やしまして、1,700尾程度にしまして、やりたいと考えてございます。このサイクルを3年間は試験というかたちで継続したいと考えてございます。ただ今後の試験に

つきましては実証試験でございますので、最終的に漁業者等のとりくみを推進していきながら進めていきたいと考えてございますが、先ほど来、話題に出ています、やはり幼魚の代金っていうのは当然経費の中では大きく縮める部分でございます。おそらく餌代も1尾につき1,000円程度はかかるという計算になりますので、やはり幼魚の部分をつきまはるかというの大きな課題でございます、その部分につきましては自分の町でできるようなことも今検討、視野に入れて進めているところでございます。ですので、よろしくお願いたします。

○委員（田中 裕君） はい。

○委員長（三澤公雄君） 田中委員。

○委員（田中 裕君） これ市場から何か問い合わせがあるの。要するにあれだけ新聞報道されてるわけで。確かにおいしいとかうまくないとかこれから試行作業で進むわけなんですけれども、市場からの問い合わせって私あって然るべきかなと思うんですけれども、その辺どうなんだろう。

○産業課長（吉田一久君） 委員長。産業課長。

○委員長（三澤公雄君） 産業課長。

○産業課長（吉田一久君） 実際に新聞に載った際にですね、札幌の市場のほうからも実際問い合わせがございました。あくまでも試験事業ということですので、育てる数も少ないし、実際に大きく市場に出荷っていうような体制ではないということで一応話をさせていただいたところでございますし、また一方で北海道漁連函館支店のほうからもいろいろお話といたしますか、この事業について興味を持っていただいております、そういった中で情報共有しながら、それで漁連のほうでもいろいろな部分でお手伝いできることはしていきたい。おそらく出荷のことも含めての話だということであちのほうも捉えてございますので、そういった意味では少なからず何件かはこの先のことも含めてですね、うちのほうに問い合わせがあるのは事実でございます。以上です。

○委員（田中 裕君） はい。

○委員長（三澤公雄君） 田中委員。

○委員（田中 裕君） そうすると3か年のサイクルでやるっていうのはいいんだけど、今聞いた段階では成功に近い数値が報告されてるわけだ。そうするとこれからの事業展開をどう図っていく。3年経たないと何とも言えないというんだけど、それも産業課としてはどのような。もしこれが成功したと。そうすれば次のステップとして、こういうことしたい。ああいうことしたいというようなプランがあると思うんだけど。今現在で結構ですから。

○産業課長（吉田一久君） 委員長。産業課長。

○委員長（三澤公雄君） 産業課長。

○産業課長（吉田一久君） まだ具体的ではないという中でお話させていただきますけれども、まずこの試験につきましては今のところ順調に進んでる。それで生残率もいい成績残してる。おそらくこのまま事故がなければ3kgを超えるのは確実だろうと考えてございます。ただし魚類につきましては、この後水温が上がる時期になりますとどうしても病気の発生ということが懸念されます。もし病気が発生した場合にはおそらくたった1日で全滅とい

うこともあり得るといふことで考えてございまして予断を許さない部分がまだあるのかなと思っております。

ただこの部分はやはり自然相手でございますので、どうにかなるか分からない中で、やはりちょっと1年で結果見るのではなくて、やっぱり2年、3年必要なのかなと思っております。特に今年あたりは凄く海水温が高く推移したということで、この成長もそういったものを大きく影響してるんだらうなと思っております。そういった中で地元でやはりこれを事業化するためには、やはり漁師さん方に普及をしていかなければならない。熊石は当然波が荒い地域でございますので、生存域は限られますので、おそらく港内ですとかそういったところを活用して養殖生簀を設置しての拡大ということになるんだらうなと思っておりますが、やはり今の青森から稚魚を買ってきては、事業としてはなかなか厳しいものはあるんだらうな。やはりそういった地域の中での規模の拡大。これは熊石に限らず、例えばひやま漁協管内でもそういった広がりの中で熊石が発祥ということで熊石の中で中間育成、要は幼魚を育てる施設を同時に睨んで進めていかなければなかなか規模拡大につながらないんだらうな。そのように捉えているところでございます。

○水産課長（伊藤 修君） 委員長。水産課長。

○委員長（三澤公雄君） 水産課長。

○水産課長（伊藤 修君） 噴火湾のほうでもですね、今いわゆる港の港内という考え方がですが、これ以上事業拡大をしていく中では、やはり外海に施設を設置してですね、事業化できるかどうか、かなり今はたった400ですけども、おそらく事業化となるとかなり数を入れてそれが生簀もかなり大きなもの。それと費用対効果。先ほど産業課長が言われた通路ですね、その辺の費用対効果の部分もあると思うんですが、将来的にやはり事業化するためには、外海での大規模なですね、飼育っていうかそういうかたちにしていかないとなかなか事業化は難しいのかなと考えておりますし、当然青森から先ほど言いましたようにその分をいれて育てるとなるとまったく現時点、机上のうえでも利潤が上がらないということも計算できますので、なんとか地元漁協又そういう規制やいろいろ許可関係も整備しながらですね、費用対効果を考えながら、外海での事業ができれば良いな。それでその中で先ほど熊石地域のほうの中間育成施設。そういうこともやりながらですね、その中間育成施設が熊石なのか八雲側にもできるのか、その辺も含めてですね、今後検討材料になってくのかな。こういうふうにご考えてございます。以上です。

○委員（田中 裕君） わかりました。

○委員長（三澤公雄君） ほかに。

○委員（田中 裕君） 餌って何時ころ蒔くの。

○産業課長（吉田一久君） 委員長。産業課長。

○委員長（三澤公雄君） 産業課長。

○産業課長（吉田一久君） 朝ですね、熊石は朝は7時から8時、夕方は今は3時から4時くらいですね。それくらいに蒔いてございます。

○委員（田中 裕君） 委員会で見に来てくれませんかと言わないの。

○産業課長（吉田一久君） 委員長。産業課長。

○委員長（三澤公雄君） 産業課長。



○産業課長（吉田一久君） 今ご報告した部分についてはやはり見ていただいた方が僕が喋るよりずっとずっと説得力がありますので、ぜひ委員会さんのほうでも現地のほうを確認しに来ていただければと思いますので、よろしく願いいたします。

○水産課長（伊藤 修君） 委員長。水産課長。

○委員長（三澤公雄君） 水産課長。

○水産課長（伊藤 修君） まだ、決まってははいないんですけれども、基本的に出来上りな部分のでは試食会みたいなのを開いてみたいと。こういうふうを考えておりますので、ぜひ委員の皆様にはそれぞれやると思いますので、味の違いなり、育ちの違いを見ていただければなど。それで感想をいただきながら、事業化が、これはいいことだなというふうに思っただけかかどうか、そういう試食会もやりたいというふうに考えておりますので、よろしく願いしたいと思います。

○委員長（三澤公雄君） 楽しみてんこ盛りで、見守っていきます。よろしく願いします。ありがとうございました。

○委員（大久保建一君） 試験栽培だけで最終的に市場に出すの？

○産業課長（吉田一久君） 一応ですね、この養殖試験ですので、これは実際に道のほうから許可を取ってやっています。これは漁業権に基づかない養殖試験ということで。

○委員（大久保建一君） そしたら出せないの？市場に。

○産業課長（吉田一久君） 実際のところ試験はいろいろ考え方がありますので、今先ほど試食会も食味試験、あるいはどこか売ってことは市場調査ってことなので、全く持って売っちゃ駄目ってことじゃないです。

○水産課長（伊藤 修君） 協力企業と協力しながらその辺は。

○委員長（三澤公雄君） 小規模の試験たって食べきれないわな。

○委員（大久保建一君） だって1,300尾くらいいるんでしょ。

○産業課長（吉田一久君） そうですね。順調に育つとそうですので。

○水産課長（伊藤 修君） だいたい1回で計算上20mmくらい。

○委員（大久保建一君） だけど輸送料考えたら高いサーモンだよな。

○産業課長（吉田一久君） 試験だからまあってところですよな。

○委員（大久保建一君） 寿司屋ならアワビより高いんじゃないの。

○水産課長（伊藤修君） 馴致作業にもけっこうなお金がかかりますんでね。

○委員（大久保建一君） 1,000円で仕入れて3,000円で売ってたら。

○委員（牧野 仁君） 利益出すのにちょっと時間かかるんだね。

○水産課長（伊藤 修君） ですから大規模にしなければ。種苗はやっぱ自前で作れるようにならないと。

○産業課長（吉田一久君） そこがポイントだろうなと。

○委員長（三澤公雄君） ユーラップネギだって、苗、自分で作るから採算合うようになってくる。

○委員（大久保建一君） あくまでも実験だね。

○委員長（三澤公雄君） しっかり試験しましょう。ありがとうございました。

【水産課・産業課職員退室】

【農林課職員入室】

○委員長（三澤公雄君） それでは二つ目、農林課から育成牧場の運営について報告をお願いします。

○農林課参事（荻本 正君） 委員長。農林課参事。

○委員長（三澤公雄君） 農林課参事。

○農林課参事（荻本 正君） 私のほうから育成牧場の運営状況について説明させていただきます。

まず1ページのほうには昨年度の育成牧場の地区別月齢別の入牧頭数の示しております。昨年は21戸から193頭の入牧がありまして、ほぼ例年どおりの頭数となっております。続きまして2ページのほうには、使用料の内訳ということで載せておりますが、2ページの上のほうの合計見ていただきまして、戸数が21戸で193頭で15か月齢未満の牛が1万1,436頭で、収入については251万5,920円、15か月齢以上のものが1万7,144頭で445万7,440円で、合計は2万8,580頭で697万3,360円で、そこから北里八雲牛については1/2減免してるということで4件から50頭ありまして、合計すると7,352頭から90万700円の減免をしますと、607万660円という収入となっております。

3ページ4ページにつきましては、育成牧場に入った牛の体重の増加についてお示ししております。まず3ページが乳牛でございますけれども、下のほうの平均で見ていただきまして、期間内の増体量が139.34kgで1日当たりになると954.42gということで前年よりも若干いい増体成績を維持しております。4ページのほうには北里八雲牛の、これは育成というか飼育の状況にあるわけですが、平均のところを見ていただきまして頭数40頭で増体量が144.03kgで、1日当たりになると986.47というふうになりまして、昨年に比べ1日当たりの増体量と、だいぶ良くなってきております。

続きまして5ページのほうで、八雲町育成牧場の指定管理手続きについてご説明させていただきますと思います。育成牧場の運営を平成30年度から指定管理制度を導入して行うということで29年度に指定管理団体の募集を行い、応募・選考・指定管理者の指定告示を行ったところでありますが、平成30年2月にですね、その指定管理団体より、指定届の提出があり、急遽育成牧場の運営はこれまでどおりの運営により、運営してまいりましたが、この度令和3年度から、指定管理制度の導入に向けて手続きを進めたいということで今回この委員会にご説明させていただきます。指定管理制度の導入する目的としては、指定管理団体での通年雇用により雇用の安定を図り牛の管理技術等の安定を目指すものであります。

スケジュールですが、5ページに示したあるとおりですね、去年の11月14日に運営協議会の方針を提示しておりまして、今日総務経済常任委員会へ説明させていただきました。これから明示事項の決定を行い、運営協議会で了承を、4月に予定しておりまして、その後、指定管理団体の公募を5月に、指定管理団体の選考をその後の6月に行い選定結果を6月中に通知したいと。それで、総務経済常任委員会へ9月に説明させていただき、指定管理者の指定告示を9月に行い、最終的には令和3年4月に協定を締結し、指定管理による管理に移行したいというふうに考えております。指定管理者の募集時には明示事項記載のと

おり考えておりますし、募集につきましては、掲示板の掲示や、広報、ホームページ等を考えてるところでございます。以上でございます。

○委員長（三澤公雄君） 報告が終わりました。皆さんから何か質疑ありませんか。

○委員（田中 裕君） はい。

○委員長（三澤公雄君） 田中委員。

○委員（田中 裕君） これ手を上げる人っているのかな。育成やりたいということになって。いる？

○農林課参事（荻本 正君） 委員長。農林課参事。

○委員長（三澤公雄君） 農林課参事。

○農林課参事（荻本 正君） 一応あるものという想定で動いております。

○委員長（三澤公雄君） ほかにありませんか。前は大学のほうの。そっちは全然やる気だったんだけど、大学の理事会のほうに資料が届いてなくて、上層部としては知らないうちに話が進んでるということで、お叱りを受けたということで撤退したと。

○委員（大久保健一君） はい。

○委員長（三澤公雄君） 大久保委員。

○委員（大久保健一君） こういうのってどうなんですか。これから需要って上向っていくんですか。予想的には。

○農林課参事（荻本 正君） 委員長。農林課参事。

○委員長（三澤公雄君） 農林課参事。

○農林課参事（荻本 正君） 育成牧場の夏の容量としては、最大 600 頭が通年で管理できるキャパとなっております。今 200 ということであれば 1/3 でありますけども、これから増える中で今、北里大学のやってる北里八雲牛だけでも通年で 200 頭入れたいという部分もありますし、研修牧場の青年舎のほうでもこれからやる中で育成牛についてはぜひ入るだけの数を入れたいということでありますので、それを足すだけでも既存の今 200 プラス北里大学で合わせて 400、そのほかに研修牧場が搾乳牛からいって 200 頭以上の育成牛が出てくると想定されますので、満杯になるというふうに予定しております。

○委員（大久保健一君） はい。

○委員長（三澤公雄君） 大久保委員。

○委員（大久保健一君） こないだどこだったっけ。どこだかの土地取得したのは。

○委員（牧野 仁君） 桜野牧場。

○委員（大久保健一君） それもこれに供していくような考えなんですかね。

○委員長（三澤公雄君） まだ取得はしていない。

○委員（大久保健一君） まだしてないのか。考えだけあれば。

○委員長（三澤公雄君） 2 年度。

○委員（大久保健一君） したらまだしゃべれないっていう。

○委員長（三澤公雄君） いや。

○農林課長（加藤貴久君） はい。

○委員長（三澤公雄君） 課長。

○農林課長（加藤貴久君） 岡山県の桜野牧場については明日予算委員会にも上程をさせていただいて。考え方としては、町が農地を持つための要件としては公共牧場用地という部分が農地法で許されてる部分。その公共牧場用地として取得をしようとしております。現状は草地でありますので、そこは飼料畑。一部宿舎も建ってますけれども、飼料畑でありますので、そこから取る餌を活用してっていう事業展開を考えてますので、公共牧場にするものと考えていただいて結構だと思います。

○委員長（三澤公雄君） ほかにありませんか。なければ終わります。ありがとうございました。

**【農林課職員退室】**

**◎ その他**

○委員長（三澤公雄君） これをもって用意した案件は終わったんですけども、その他の会員の皆さんからありますか。なければ終わります。ありがとうございました。

[ 閉会 午後 2時39分 ]